

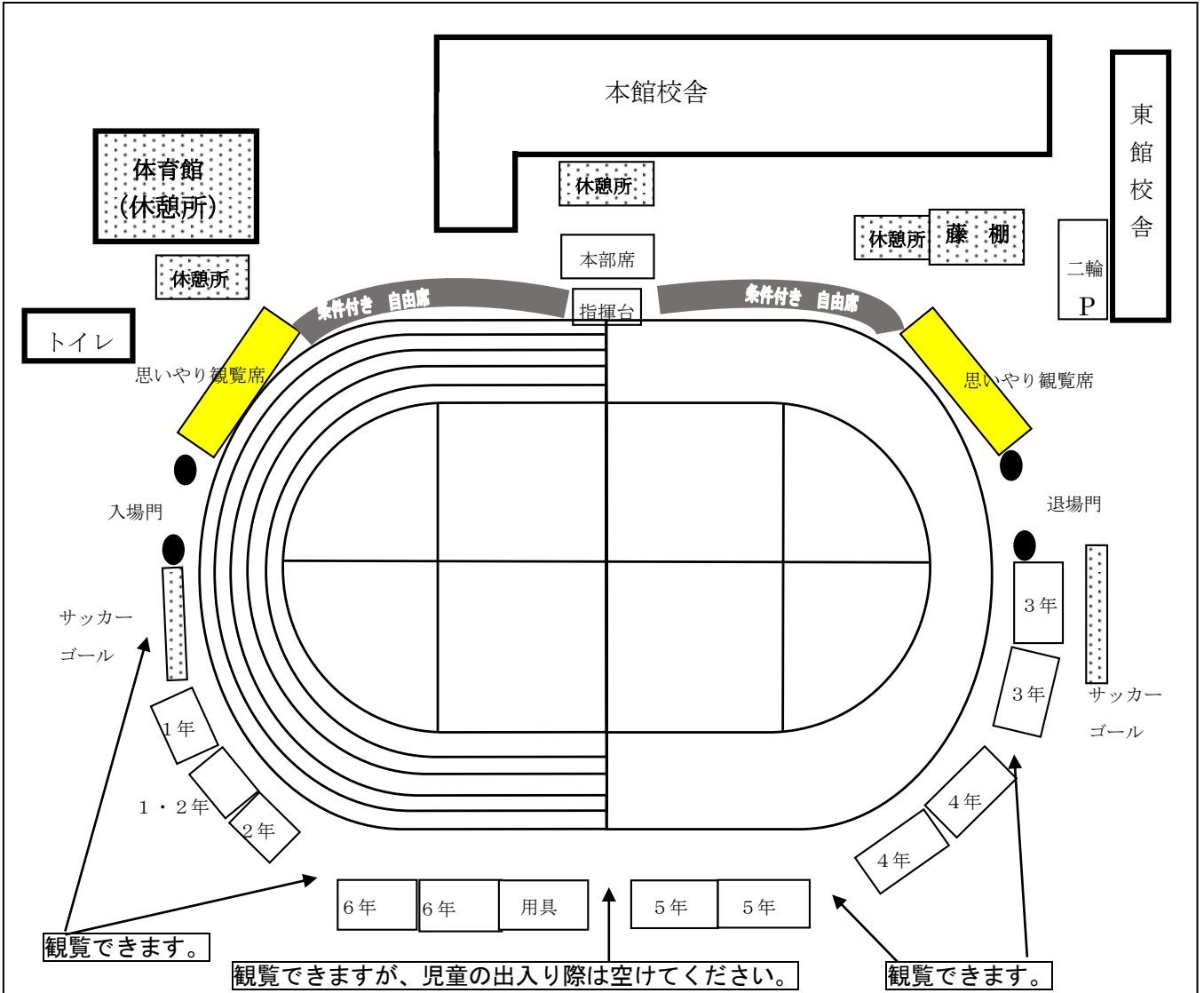


# 学校便り 琢磨

令和5年度 第14号 R5.10.10 三豊市立詫間小学校

## 運動会の観覧場所について

本年度からは、午前中開催で、再び全校での「運動会」として行います。令和元年度までの「運動会」や、昨年度までの「体育学習発表会」とは、大きく観覧場所が変わりますのでお知らせします。



・各テントの後方から観覧いただいてもかまいません。(本部、児童、用具テントの中は入れません。)なお、授業中となりますので、お子様への個別の声かけ等にご遠慮いただけますようお願いいたします。

**休憩所** 休憩所はテント1張です。ブルーシートはありません。3か所あります。体育館も開放します。

**思いやり観覧席** 思いやり観覧席は、テント2張で2か所あります。ブルーシートを設置します。テントが必要な方(お年寄り・赤ちゃん連れなど)に思いやりの心をもってお譲りください。

**二輪P** 東館の凶工室の横に、自転車・オートバイの駐輪場を設置します。駐輪場が混雑することが予想されますので、ぜひ、自転車・オートバイ等での来校をご検討ください。

**条件付き自由席**は、写真撮影場所です。シート・テント・イス・日傘の使用はできません。お子様の演技・競技の時のみ、譲り合って撮影してください。

## 仮面ライダー snack 問題

放送委員会の「先生紹介」で、「好きなキャラクターは？」という質問に対して「仮面ライダー1号、2号です。」と答えました。これは、本当に、「仮面ライダー」とは、私が小学校2～3年生の頃、テレビにかじりついて見ていた番組です。「変身！」する（人間が変身して仮面ライダーというヒーローになり敵をやっつける）のがとてもカッコ良くて、学校でも仮面ライダー変身ベルトを作って、仮面ライダーごっこ（仮面ライダー役や怪人役、ショッカーの戦闘員役になって戦う）をしたものです。必ず、最後は、仮面ライダーが勝つという設定でした。

この先生紹介が詫間小で放送されると、さっそく子どもたちから「仮面ライダー1号、2号、知っています。」とか、「ちびまる子ちゃんの漫画で、カードだけ取ってsnack菓子を捨てていたということがあったというのを見たことがあります。」なんて反応が返ってきました。

そうなのです。まさに、私たちが子どもの頃、この「仮面ライダー snack 問題」が起こったのです。その問題とは、1971年に、テレビの人気番組「仮面ライダー」に登場する仮面ライダーや怪人（悪者）のカードが1枚入ったsnack菓子が、1袋20円で販売されました。50年以上も昔のことですので20円は、そうですね、今の感覚では100円以上ですかね？そのsnack菓子「仮面ライダー snack」が飛ぶように売れたのです。当時の子どもたちの目的は、お菓子ではなく袋の中に入っている「カード」です。そのカード欲しさに、親や祖父母にねだったり、お小遣いをつぎ込んだりしたものです。snack菓子も結構おいしかったのですが、子どもたちが欲しいのはカードだったので、カードだけ取って、お菓子は食べずに捨てるということが全国的に多く見られるようになったのです。一度に何袋も買って、カードだけ取って、お菓子は食べ切れないから捨てるということが起こったのです。今から50年以上も昔のことですから、お菓子は貴重だった（お店でお菓子を買うのはたまにで、ほとんどは家で手作りおやつという時代）ので、大人たちは、当時の子どもたちのすることが信じられないといった状況でした。私は、このsnack菓子が結構好きでしたから、お友達がごみ箱に捨てようとした物をももらったり、時には、捨てているのを拾って食べたりしていました。もちろん、私もカードを集めて、学校が終わったら、カードを持って友達の家に行き、持っているカードを見せあっこしたものです。このカードの中にはごくたまに「ラッキーカード」が入っていて、それをお菓子の会社に送ると、このカードを入れるアルバムが送られてくるのです。私も、ラッキーカードを当てたことがあり、アルバムは、まだかまだかと、毎日ポストをのぞき込んでいたことを思い出します。このカードブームは2年もしないうちに終わってしまったと思います。しかし、その間、当時の子どもたちは熱狂したのです。

よく考えてみると、時代も大きく変化していたのだと思います。終戦後のとても貧しい時代から高度経済成長の時代に入り、物がどんどんあふれるように作られ、人々がお金をおしまず買いまくった時代へと変わっていたのです。ちょうどその時、私たちは小学生だったということです。それまで長く続いた「質素儉約」の生活から「消費拡大」の生活へと急激に変わっていく中で、当時の子どもたちにまず、「カードだけ取ってお菓子を捨てる」なんていう、それまででは想像すらできなかった現象が発生したのではないのでしょうか。いつの時代も「育てたように子は育つ」のですから。

実は、その当時の子どもたちが若者として成長した時、その若者たちは「新人類」と呼ばれるようになります。「新人類」とは、1986年の新語・流行語大賞になった言葉で、戦時中や戦後すぐの世代の人々から、1960～1970年生まれくらいの世代を「これまでとは異なった感性や価値観、行動規範をもっている若者」という意味で「新人類」と総称されたわけです。「新しい人類」ですから、なかなか衝撃的なネーミングです。その新人類が子どもの頃に起こった「これまでは考えられなかったお菓子を捨てるという問題」とも関連があるのかも知れませんね。この新人類たちも、もう還暦（60歳）を迎える年となっています。私たちがよく言われた「最近の若い者は……」というセリフ。そう言えば、私たち世代は、あまり言わないような気がします。まだ「新人類」なのですかね？